

平成 30 年度（公社）全国公立文化施設協会主催 中央コース

「松竹大歌舞伎」

製作発表会見が行われ
出演者が語りました！

中村橋之助改め 八代目 中村芝翫 襲名披露

中村国生改め 四代目 中村橋之助 襲名披露 / 中村宗生改め 三代目 中村福之助 襲名披露



5月16日に行われた製作発表会見の様子です。

当日の雰囲気がお伝えできるよう、出演者の言葉遣い等、なるべくそのままに、掲載しています。

中村芝翫（なかむらしかん）：



みなさま、おはようございます。芝翫でございます。

一昨年からはじめましたこの襲名興行も、これをもちまして走り切ることができ
ます。こうやって黒の紋付を着させていただいて、皆様の前で記者会見をする
興行も、これで打ち上げでございます。

この興行に関しましてはまだ終わってはいませんが、
多くのみなさま方にお力添えを賜ったこと本当に深く感謝をするともに、
改めて父の偉大さを痛感いたしました。

そして今度も親代わりのように襲名披露に出演して下さった梅玉の兄様。
親をなくして心寂しくしておりましたけど、お兄様の本当に穏やかな常日頃の
姿勢を拝見して、歌舞伎役者たるもの、こうなくてはいけないというものを、身
を持って教わったような気がいたします。

そしてこの興行、去年は西（コース）と東（コース）をまわらせていただきました、今回は中央コースでございます。僕は西と東で一番中央コースに行っているのではないかな。行っているということは、この中央コースで一番いろんなお役を勉強させていただいたような、思い出深い巡業でございます。そこでこうしてまた親子揃って襲名披露ができます。

芝翫を襲名するにあたって、以前、時代物を主流とするような発言をいたしましたけど、その中で近年では「魚屋宗五郎」をやらせていただいたり、3月には「芝浜革財布」、来月「巷談宵宮雨（こうだんよみやのあめ）」と、世話物を最近強く志してやっていくわけですけど・・・、自分の仁にあうかな、体にあうかな、と不安を抱きながら去年の顔見世で、この文七の長兵衛をやらせていただきました。

「文七元結」は、古く言えば、紀尾井町のおじさま（二世尾上松緑）、そして中村屋のおじさま（十七世勘三郎）、そしてうちの中村屋の（十八世）勘三郎の兄が勤めておりましたので、私とは無縁、ほど遠い役かなと思っておりました。けれども去年の12月に、長兵衛を勤めさせていただきまして、この作品の素晴らしさ、人情の温かさ。そして自分自身も経験した襲名で、人に支えてもらった心の優しさというのを、この作品を通して味わったような気がいたします。

父がなくなりました年におこった東北大震災。うちの父親も大変に心を痛めておりました。

ちょうどその地震がおきた時が3月11日。うちの父の誕生日でございます、何かそういう意味でも深い関わりがあるなど。そういうところも今回巡業でまわらせていただきます。そういった方々に僕たちが今できることというのは、芝居をすることによって、人に勇気を伝えるということ。それがわたくしどもの使命であると、そのように感じております。

そういった意味でもこの人情噺、大変によくできた作品でございます。

各地のみなさま方に喜びと悲しみと勇気を・・・、悲しみを与えてはいけませんけど・・・、悲しみをへて勇気を得るといふ、そういうものを少しでもみなさんに与えられたらいいなと思っております。

そして せがれども でございますけれども、橋之助、福之助、歌之助。

歌之助は高校の学業がでございますんで、不参加ではございますが・・・。

この襲名を通して自分自身がどうあるかなという時に、息子たちの姿を見て、肉体的にも精神的にも少しは大きくなっているな、と。親として、親ばかではございますけれども。これもこの襲名のおかげだと感謝しております。

せがれども二人が、「棒しばり」という大役を勤めさせていただきます。この襲名興行にあたっては、橋之助、福之助、歌之助、身に余るお役をさせていただいたこと、本当にこれはみなさま方のおかげだと深く感謝しております。

暑い盛りではございますが、多くのお客様が各地で劇場に足を運んでいただけることを望んでおります。みなさまどうぞよろしく願い申し上げます。

中村橋之助（なかむらはしのすけ）：



おはようございます。中村橋之助でございます。

ただ今父が申した通り、昨年からはまった襲名も今回のこの興行をもちまして、最後となります。本当に僕は一昨年の10月から身に余る大役、自分の憧れていた大役というのを沢山勤めさせていただきました。

その中でこうしてこの締めくくりの興行で「文七元結」の文七を、そして鳶頭（とびがしら）を、最後には弟と「棒しばり」を勤めさせていただく、こんなうれしいことはありません。

文七元結は、もちろん父が申した通り、紀尾井町のおじさま（二世尾上松緑）や、（十八世）勘三郎のおじのもの、もちろん去年父がやったものも見ました。ずっと勤めたいな、こういうお役やってみたいな、と憧れのあったお役でございます。

さらにこういった世話物の中で、お話の軸となるようなお役をさせていただくのも初めてのことで。

口なれたりお芝居の中でとけ込んでいけるように、そして、今回弟の福之助とダブルキャストですから、両方見てくださったお客様に「橋之助の方が良かったわ」と言っていただけるように勤めたいと思います。（笑）

「棒しばり」でございますが、小さい時からうちの兄弟3人は子供の頃の遊びが、お芝居ごっこ。

その月に父がやってる演目を、家で、ソファーやテーブルを大道具代わりにお芝居ごっこをするという遊びだったんですけども、その中でも頻繁に出てきた小さい時から大好きだった演目です。

それを初役で、そして弟と二人で勤めさせていただくというのは、先輩や後輩と勤めさせていただく以上に、弟と二人で手を携えて一つの演目をさせていただける。こんな心強いことはないです。

お客さまに楽しんでいただけるように、今からもうお稽古を始めております。

そしてこの「棒しばり」はお狂言物ですから、そういった匂いもちゃんと残しつつ、お客様に楽しんでいただきたい。また打ち出しの演目ですから、お客さまに「楽しかったな、観に来て良かったな」といい感想が沢山、お帰りの中での出るように勤めたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

中村福之助（なかむらふくのすけ）：



おはようございます。

今回の巡業では「文七元結」の文七と鳶頭（とびがしら）を兄とダブルキャスト、「棒しばり」をも兄とやらせていただきます。

この一年半続いた襲名披露公演では、本当に本当に身に余る大きなお役を沢山やらせていただいて、自分自身濃い一年半を過ごせたかなと思っています。

僕自身、変わったかどうかはわからないですけど、吸収できるものが沢山あった一年半だったかなと思っていて、その締めくくりが今回の巡業です。

兄が言っていた通り「文七元結」、「棒しばり」は、小さい時から親しみのある演目です。「文七元結」は、去年の12月父もやっていて、それで見ました。

実感がそこまでまだちゃんとわいてないんですけど、今まで見てきたお芝居に出させていただくというのは、うれしく、楽しみな気持ちでいっぱいです。

この一年半で、兄や父と息をあわせて踊らなければいけない「連獅子」だったりをやってきていて、家族でも色々試行錯誤してやってきました。

この「棒しばり」というのは、息をあわせて踊らないといけないですし、そこもこの襲名の一年半やってきたことの積み重ねで、今回どれだけ兄と一緒にできるかというのも僕の中では、頑張らなければいけないな、と思う点でもあります。若手らしくフレッシュさ純粹さを出して、純粹さをお届け出来るように頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

中村梅玉（なかむらばいぎよく）：



おはようございます。梅玉でございます。

先ほど、こうちゃん（中村芝翫）が申し上げましたように、一年半以上に渡るこの芝翫一家の襲名。

私は、去年のお正月の大阪松竹座の公演を除いては全てご一緒させていただくことができました。

先代芝翫、神谷町の兄には世話になりっぱなしで、何の恩返しもできておりません。この襲名興行ほとんど全てにお付き合いできたことは、先代芝翫、神谷町の兄さんに対する恩返しだと思っています。

ともかくやっぱり、襲名っていうのはまわりのみなさんに引き立てていただいて、その時は立派な出来になるけれど問題はその後だと、以前申し上げました。

わたくしたちもさんざん親たちにそれを言われておりました。

こうちゃん（中村芝翫）はすでに以前から立派な役者で、この芝翫を継いでからますます役者ぶりが大きくなって、これからの歌舞伎のリーダーとなることは間違いないと思って安心しております。

ともかく二人の息子たちはこの一年半の間に本当に役者ぶりが良くなりました。

これはすごくうれしいです。はっきり言って襲名前まではひよっこでしたけど、この一年半の間に、すごく役者ぶりが良くなって、一人前の役者になってくれたのがすごくうれしいです。

歌舞伎ってのは芸の伝承。これが一番大事なことで、だからこそずっと 400 年以上も続いているわけです。こういう襲名して役者ぶりが上がるというのは、すごくいいことだなあと考えております。

今回、公文協の中央コースということで、やっぱり普段なかなか生で歌舞伎を観に来られるチャンスがない地方のみなさんに、歌舞伎をお届けするわけです。たぶん皆さんこの 1 日の公演を楽しみに、待っていらっしゃると思いますので、我々も精一杯全力でみなさんの期待にお応えしなければいけないと考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。

(質問：地方公演ならではの楽しみ、難しさ、気を使うことは?)

中村芝翫：

地方公演、この巡業、一日ずつかわる舞台、すごく好きなのでございます。

去年の西（コース）と東（コース）もおかげさまで大勢お客様が入っていただきました。

普段は、例えばうちと劇場であったり、地方だったら劇場とホテルの往復だったりで、あんまり、人に会うことがないものです。巡業だと移動だったりで、すごく土地の人にふれることが多いんですね。

そうするとみなさん「芝翫さん」と声をかけてくれることが多くて。

こちらでも芝翫と襲名したことを知ってくれているんだとうれしく、また「おめでとう」と言ってくると、襲名したことを実感したりする。

また、地方の芝居のお客様の、見てくださるところが違ったりして、新しい自分自身で発見があったりすることが多いです。そんなようなことで、この地方興行が好きです。

難しさは・・・

舞台によっては大きさが違ったりし、舞台の大きさや道具の配置の難しさとか、そういうところは大変だと思います。

以前は「棒しばり」をさせていただいた時に、踊りが大変でしたよね。

所作舞台を敷きますでしょ。所作舞台は各劇場の所作舞台を使ったりするんで、年がら年中使っている所作舞台は踊りやすいんですけど、一年に一回しか出てこない所作舞台はちょっと反りがあったり、ぶよぶよしてたり。アイススケートのようにつるつるつるすべったりとか。

でもそこで新しい発見があったり、そういうものを芝居のエッセンスとして取り入れると面白いんじゃないかなと思いますね。

(質問：歌舞伎を観たことがない人へのメッセージ)

中村芝翫：

ご覧にならない方には、やっぱり歌舞伎って難しいとか、長いとか、眠くなっちゃうとか、何言ってるかわからないとか、多いですけど・・・今回の狂言「文七元結」と「棒しばり」は、誰が見てもおもしろい。すごく親しみやすい狂言だと思っております。

去年は、「熊谷陣屋（くまがいじんや）」という、かっこいいものをやらせていただきました。べつに文七がかっこいいということではなく、今回は、朗らかになるような、なんか口角がむって上がってお帰りになるような、そんな狂言を選んだつもりです。本当に見たことがない方がご覧になって面白いと思います。

でも例えば野球でも相撲でも映画でもそうなんです、何にしてもライブですから、

その劇場の中へ足を運んでいただいて、その空気、空間というものを味わっていただきますとやみつきになります。

これをきっかけに、歌舞伎鑑賞の糸口になると思います。

2018年5月16日